

## 滋賀県文化審議会 第30回会議 会議録

- ◆ 日 時 : 令和5年(2023年)2月8日(水) 14:30-16:00
- ◆ 開催場所 : 滋賀県立美術館 木のホール(大津市瀬田南大萱町1740-1)
- ◆ 出席者 : **【委員】**  
片山 委員(会長)、岡田 委員(会長代理)、磯崎 委員、井上 委員、上田 委員、  
奥村 委員、川戸 委員、北村 委員、寺嶋 委員、林 委員、南 委員、三宅 委員、  
若林 委員(15名中13名出席)  
**【事務局】**  
谷口 文化スポーツ部長、保坂 県立美術館ディレクター、目片 文化芸術振興課長、  
村田 文化財保護課長、木村 県立美術館副館長、辻 文化芸術振興課美の魅力  
発信推進室長、矢田 文化財保護課美術工芸・民俗係副主幹 ほか
- ◆ 議 題 : (1) 滋賀県文化振興基本方針(第3次)の進捗状況について(中間報告)  
(2) 重点検討事項について  
(3) 第2期滋賀県障害者文化芸術活動推進計画の策定について  
(4) 「風流踊」のユネスコ無形文化遺産登録等について
- ◆ 発言内容 :

発 言 者	発 言 内 容
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 開会</li> <li>挨拶</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 委員紹介および会議成立の確認</li> <li>■ 事務局出席者の紹介・配布資料の確認・諸連絡</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ (1) 滋賀県文化振興基本方針(第3次)の進捗状況について(中間報告)</li> </ul> <p>資料1-1、資料1-2にて説明。</p>
井上委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県政モニターアンケートの回答率がもう少し高くても良いのではと思う。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県政モニターアンケート調査は、毎月テーマを変えて約300人を対象にアンケートを実施している。</li> <li>・ 県政世論調査は標本数が3,000人、有効回収数が2,034人、回収率が67.8%となっている。</li> </ul>
奥村委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県政世論調査で、順位が下降している質問が多い。いつとの比較か。また、下降している理由は何か。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前年度の結果と比較している。</li> <li>・ デジタル化に関する質問が新しく入っており、相対的に下がった。</li> </ul>

発言者	発言内容
奥村委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「文化芸術活動に取り組むことができる環境が整っていると感じますか」という数値はあまり変わらないのではないかと考える。原因は何か。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 共生社会や滋賀県の魅力など、コロナを通して県民の皆さんが考えることが多かったからではないかと考える。</li> </ul>
奥村委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2022年度の都道府県の魅力度ランキングで滋賀県は38位であった。施策や取組をされていると思うが、県民としては寂しい結果である。</li> </ul>
南委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資料1-2の17ページの情報発信の意見に関連して、もっとLINE等を通じて、情報発信してはどうか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 滋賀県が統一的に持っている公式のLINE、Twitter、Facebookで情報発信している。</li> <li>・ 今年度中に、文化芸術に関するポータルサイトを滋賀県のホームページ内に開設しようと準備中である。</li> </ul>
片山会長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「文化芸術活動に取り組むことができる環境が整っていると感じますか」という数値が34.2%に落ちている。要因を考える必要があると考える。</li> </ul>
寺嶋委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資料1-2の7ページの「電子機器で鑑賞した」というのは、「ながら」鑑賞も入っているのか。</li> <li>・ 無料だから電子機器で聞いたというレベルなのか、有償できちんとした音楽鑑賞をしているのかによっては、施策の力の入れ方を考えていけないといけない。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ おそらくそういう方も入っており、回答者に委ねている。</li> </ul>
寺嶋委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ このことによって文化振興施策で考慮することはないか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電子機器での鑑賞は、令和2年から使っている指標だが、「ながら」なのかの区別までは把握していない。御意見を踏まえて検討する。</li> </ul>
寺嶋委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 芸術作品の鑑賞であれば、美術館の展示品を有償で開示するとか、びわ湖ホールコンサートも有償化するなどのアプローチに繋がっていくと思う。</li> </ul>

発 言 者	発 言 内 容
事務局	<p>■ (2) 重点検討事項について</p> <p>資料2-1、資料2-2にて説明。</p>
片山会長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市町の文化協会と県内の団体の状況で、2020年と2022年を比べてかなり減っている。どういう状況なのか心配である。</li> <li>・ 資料2-2では地域別の分析等が行えていないので、各委員が御存知の地域や分野別の事情、数字だけでは見えてこない点など、この調査の分析について御意見をいただきたい。</li> <li>・ ヒアリングはごく少数のサンプルなので、補足していただきたい。</li> </ul>
井上委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コロナもあるが、文化協会に加盟しながら文化活動を行っていくというスタイルはかなり厳しい。個人単位で活動していることが多く、構成員が高齢化しており、公民館等での教室をもとに次の団体を作るというサイクルが行えなくなっている。</li> <li>・ 裾野が狭くなっている。例えば、公募展で出してもらっている数、質が、運営も含めて難しくなってきた。県展でも、高校生の作品が展示され、斬新なものや若者の感性だなと思ったものはあったが、その広がりが弱い。</li> <li>・ 部活動の地域移行の問題がある。先生方が指導できなくなった場合に、地域で受け皿となって指導する方がどれぐらいいるか。それによっては、美術部や写真部等の部活動ができなくなってしまう可能性がある。</li> <li>・ 求めている人とそれを供給できる場というところでミスマッチが起こっている。市町は、ほぼ1つずつホールを持っており、展示スペースもたくさんあるが、展示や演奏活動をする具体的な人がつかめていない。発表できる場が欲しいと言う人がいる反面、市町では発表する方を見つけ出すことができている。これをうまくコーディネートできるような仕組み、システムができるとお互いにwin-winになる。</li> </ul>
片山会長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 部活動に関する指導者で言うと、今回調査した県内で活動する個人の芸術家の方々がその担い手になれる可能性があるため、そこがうまくマッチングできたら良い。</li> <li>・ 活動の場と行政が用意している活動スペースのミスマッチがあるとの指摘も今後の対策を考えていくべきである。</li> </ul>

発言者	発言内容
川戸委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資料2-2を見ていると、実際に文化芸術活動をされている方の属性としてはプロとセミプロとアマチュアの3つのタイプに分かれていることが分かる。</li> <li>・ そこから、文化芸術活動をされている方の収入バランスと芸術活動に対する目的を今後整理していくことで、支援の仕方や場所の提供を考えることができる。</li> <li>・ プロでも無償とする芸術活動、本業の芸術活動と指導する活動など、3役、4役している芸術家がいるが、その方への支援と評価のあり方について何か考えがあるか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 専業か兼業か生業としていないかでソートを絞ってクロス集計を行い、専業の方は、他の質問の中でどういうことを感じているかということは集計できると思う。</li> </ul>
片山会長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ そもそもコロナ前にどういう形態で活動されていたかという類型をちゃんと分析していくと良い。今後どういう形でその人たちの活動・生活を持続させることができるのかというところで、単に公演の収入とか作品販売の収入だけではなく、教育活動や部活動に貢献することで収入を得たり、観光や地域の活動への貢献で得る可能性もある。</li> <li>・ コロナ前の収入構成別のクロス集計などでいろいろな情報が得られる。</li> </ul>
寺嶋委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ヒアリング結果の「求めるもの」の中で、広報を支援してほしいという声が多いが、例えば、音楽と他の芸術を一緒にするなど、組み合わせて要望や不満を解消していくということを考えているか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本方針でも他分野との連携を書いているとおり、文化だけでなく、例えば観光や福祉などいろいろな分野と連携して、求めるものについて解消できるよう、引き続き検討していきたい。</li> <li>・ 今年度は芸術と農業をテーマとして、観光型農業公園を舞台に、歌のコンサートや写真の撮り方を学ぶ事業をした。農業公園からは今までアーティストとあまり接点がなかったが、今回のイベントによって県内に書道パフォーマンスをする人がいたり、歌手がいることが分かったので、次の機会にこういう人に頼みたいという声をいただき、今後の良い参考事例となった。</li> </ul>
北村委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コロナ禍において補助金があったが、個人としても団体としてもそれを利用することはできなかった。公演の会場を借りる支援はされているが、芸術活動</li> </ul>

発言者	発言内容
片山会長	<p>で生活している者にとっては、日々の稽古であったり、団体で言うと月に2回集まるワークショップや習慣的に行われているものがなくなる方が深刻である。しかし、そこに対しての支援が見つけられない。公演をすることだけではなく、恒常的な活動に対しての支援が広がっていけば良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先ほどからコラボレーションとコーディネートという2つのキーワードが出ているが、助成や支援をしていただいて作ったものを街の中や市民の人たちが常に行動している場所で広げていくことが大事ではないか。</li> <li>・ 福祉と芸術と地域のコラボレーションがもっとできていければ解消されることがあると思う。また、そこで得られる知識、知恵が社会に生かされていくのではないか。</li> </ul>
南委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 公演以外の収入源が、コロナ禍でなくなったということがある。指導している文化団体が活動しないことで収入がなくなるというケースがある。そこも含めてしっかり把握していく必要がある。</li> </ul>
磯崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 令和5年5月8日からマスクを外して良い状態になるので、これから活動しやすい方法を考えていただきたい。自分たちで活動の場を見つけるのは大変なので、演奏家の皆さんに発表のオファーがくるように、そういう活動場所を作っていただきたい。</li> <li>・ 企業とうまく繋げていただきたい。企業でも音楽や美術に理解があって支援してくださる企業もあるが、まだ冷たいものを感じる時があるので、結び付けてくれるコーディネーターの方がいると広がる。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長浜市の文化協会の所属団体数は半減している。この3月で滋賀県の一番北にある余呉文化ホールが閉館する。年間の使用率が10%を切っており、市としても年間何千万という維持費がかかってしまうので、判断は正しいのかもしれないが、地域で活動される方にとっては大変なこと。</li> <li>・ 最後にホール閉館のイベントをしようと地域の方に声掛けしたが、3年間皆さん活動されていなかった。コロナもあり、活動する場もきっかけも発表の場もない。それを支援していた講師や指導者の方が指導することによって得られていた収益も減ってしまって、指導者の方がおられなくなってしまった。それによってまた活動再開できなくなってしまうという悪循環が続いている。</li> <li>・ 「文化芸術活動に取り組むことができる環境が整っていると感じますか」という指標は、市町の裾野の部分が一番重要になってくる。地域で活動する方にとっては、教えてくれる方や指導者の方が貴重で、そういった方をどうしたら</li> </ul>

発言者	発言内容
奥村委員	<p>支援できるかというところが今後課題になってくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指導者に関しては、中学校の部活の地域移行の話で、やはり文化部の指導者がおらず、文化部の地域移行がとてもしづらい。一番下の地域の方々の支援、そしてその地域を下支えしてくれる草の根で活動されていた講師や指導者の方、こういった方への目がどこまで行き届くかが今後必要。</li> <li>・ ヒアリングで、プロデューサーの方や茶道家の方が、「求めるもの」で情報の一元化が必要とおっしゃっているが、求める人と求められる人のマッチングがされていないからこういう依頼が出てきていると思う。これを是正していく方策を考えているか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県では、文化芸術のポータルサイトの作成を進めている。現段階では施設の情報やアーティストの情報、後援するイベント情報など、一つにまとめて発表するサイトを予定している。ただ、マッチングをするまでの支援はできない。</li> </ul>
奥村委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 民間ですることは考えているか。</li> </ul>
事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 考えていない。</li> </ul>
林委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 若者と子どもも変わってきている。若者は発信が個人になっている。ネットの普及により、私達と考え方や方法も全然違う。</li> <li>・ 子どもの音楽活動が変わってきているので調査したが、親世代のネットの考え方が、私達よりも前向きに捉えている。歌だけではなく、子どもたちの音楽という概念が広がっている。文化芸術の概念自体の捉え方を変えていく必要があるのではないか。伝えていくものと、逆にその時代に対応していくものと考えていかなければいけない。</li> </ul>
事務局	<p>■ 議題(3)第2期滋賀県障害者文化芸術活動推進計画の策定について 議題(4)風流踊のユネスコ無形文化遺産登録等について</p> <p>資料3、4に基づき説明。</p>
三宅委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先日風流踊の登録記念講演会に行ったが、子どもたちが生き生きとしていて、祭りの持っている教育力を改めて認識した。</li> </ul>

発言者	発言内容
上田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祭りなどの文化財もコロナで大きな影響を受けた。条例や基本方針が対象としている文化は、芸術文化だけでなく、歴史的な文化遺産と人々の生活が作り上げた風景もある。それぞれコロナの影響もあり、景観を支える産業も変わっているため、分野横断的な対策が必要。</li> <li>・ 補助金を利用された方を比率で示されると改めて少なさに驚いた。ニーズとずれている。穴があいているところだけを支えるのではなく、日頃からの土壌をどれだけ育てていくか。</li> <li>・ 今年3月末までに県のホームページにサイトを立ち上げるとの話だが、県が把握している県関係のものだけに限られていると感じる。議論の中で市町の情報も隅々まで行き渡らないという県内の格差の問題があったので、県のサイトを充実していただきたい。</li> <li>・ 文化協会的な組織が学校等と連携して、文化芸術分野の当事者の拡大に寄与していた側面はあると思うし、属地的なネットワーク組織が弱体化していることは大いに懸念される。</li> <li>・ 一方で、滋賀県の農業を兼業農家が支えてきたように、文化芸術に関しても兼業芸術家が滋賀において文化芸術活動を支えていると思う。その部分をどう支援をしていくか。</li> <li>・ 近年、コミュニティスクールの活動なども盛んに進められているという状況も踏まえて、部活動の地域移行も改めて、学校教育と連携したあるいはコミュニティスクールの観点に立った公民館活動と社会教育施設と連携した活躍の場の開発とか支え手の育成などを分野連携で考えていく必要がある。</li> <li>・ 芸術をはじめとしたクリエイターの属性の人の移住のハードルは低い。滋賀県は、家の広さや環境の良さや意外とアクセスが良いので、魅力を感じている人が結構多い。現に著名なクリエイターが住んでいるので、市町振興課等とも連携して、住まいも含めた支援ということも本県の特徴を生かして幅広くやっていく必要がある。</li> </ul>
事務局	挨拶
事務局	■ 閉会